

確信を持って祈る

失望を希望にかえる祈りとは



画像: Image generated using Gemini (Google AI)

レイアウトデザイン: Akwilla Saras

聖書は特に記載のない場合は新改訳2017、
その他の場合は新共同訳聖書、リビングバイブルを引用

新改訳2017: ©2017新日本聖書刊行会

新共同訳: ©共同訳聖書実行委員会

Executive Committee of The Common Bible Translation

©日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987,1988

リビングバイブル: Scripture quotations taken from the Japanese
Contemporary Bible Copyright©1978, 2016 by Biblica, Inc.®
Used by permission. All rights reserved worldwide.

A.W.トウザー (柳生直行) 「神への渴き」いのちのことば社、1990年

翻訳: 田井淳子・藤井正也

改訳・ローカライズ: 山田風音

編集・校正: 有澤優子・ニコルス明子

発行所: 有限会社デイリーブレッド

住所: 大阪市中央区玉造 2-26-47 大阪クリスチャンセンター内

Website: japanese-odb.org • Email: japan@odbm.org

転載および転記には許可が必要です。

この冊子は正統なキリスト教の教理に基づいて制作されました。エホバの証人、末日聖徒イエス・キリスト教会 (モルモン教)、世界平和統一家庭連合 (統一教会)、全能神教会などの教理とは大きく異なることをご承知ください。(弊社の信仰告白は公式サイトでご覧いただけます。)

原作: "Praying with Confidence" by David Egner

© 2026 Our Daily Bread Ministries, Grand Rapids, Michigan

All rights reserved.

2026年4月10日発行

Japanese DS Praying with Confidence



もくじ

確信をもって祈る

失望を希望にかえる祈りとは何か

祈れないとき.....	6
基本に戻る.....	11
みことばに根ざして祈る.....	40
今度祈るとき.....	45

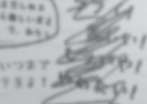
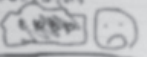


読書の中心をどうするか
読へん88

「さよ、おかしな事、てんてんてん」 彼は、
あつて居て何げもなく、物事にあつて居る。
あつて居る物事にあつて居る。あつて居る。
あつて居る物事にあつて居る。あつて居る。
あつて居る物事にあつて居る。あつて居る。

あつて居る物事にあつて居る。あつて居る。
あつて居る物事にあつて居る。あつて居る。
あつて居る物事にあつて居る。あつて居る。

あつて居る物事にあつて居る。あつて居る。
あつて居る物事にあつて居る。あつて居る。
あつて居る物事にあつて居る。あつて居る。



『確信を持って祈る』

失望を希望にかえる祈りとは

デービッド・エグナー

失望は私たちが祈りから遠ざけます。人生をめっちゃにされたという怒りや恨みを抱きながら祈るのは困難でしょう。まして、神ご自身に失望しているならなおさらです。

神は、私たちのそんな気持ちをよくご存じです。一人ひとりがご自身の「恵みの御座」に進み出られるよう、道を備えてくださいました。「祈ったのに聞かれなかった」という経験はありますか。「祈ってもどうせ何も変わらない」と実は思っているかも。もしそうなら、デービッド・エグナーによるこの冊子は一助になるはずです。

デイリーブレッド・ミニストリーズ



第一章

祈れないとき

祈りについて聖書から学ぼうと集まった人たちに、私は「正直なところ、私は_____」と書かれた紙を配り、それぞれ自分の祈りに関して空欄を埋めるようお願いしました。

あなたならこの空欄、どう埋めますか。読み進める前に、ぜひやってみてください。

「正直なところ、私は_____。」

参加者の回答は以下の3パターンに大別できます。

- 「私は祈りが足りない」
- 「私は何を祈ればよいのか分からない」
- 「私は祈って何か良いことがあるのかどうか分からない」

どれも多くの人を感じる事です。「私は祈りを通して神と自由に会話している」と答える人もいますが、挫折感や敗北感

を覚える人の方が多いようです。

「祈りは難しい」と思う気持ちはよく分かります。祈りは単に自分の気持ちを神にぶちまけることではありません。どんなに小さくても弱くても、信仰の表明です。神とともに歩もうとするなら内面の葛藤や周囲との摩擦は避けられません。しかし、祈りはそんな私たちの武器です。祈りは一人一人の神との関わりの反映ですが、無知や不注意、鈍感さゆえに、しばしば途切れたり、ぎくしゃくしたりします。祈りは神への信頼の証しですが、それはたびたび失意に覆われてしまいます。

キリスト者になりたての頃は、大きな期待を抱いて祈ります。神が自分の心からの願いをかなえ、親密さと幸福感で満たしてくださると思います。神を信頼してさえいれば、どんな困難も乗り越えられると信じます。

ところがじきに、自分にとって切実な願いがかなえられない、という体験をします。病気の友達に「祈ってるから絶対良くなるよ」と伝えたのに、回復の兆しがない。自分たちの問題が解決するよう家族の前で祈っているのに、事態が好転しないまま何カ月も過ぎると、祈りが無視されているようで、家庭も気まずくなります。家族や友人がイエスに出会ってほしいと一生懸命祈り続けているのに、彼らの態度は変わらない。

こんな経験が続くと、心がじわじわと失望にむしばまれ、祈りへの情熱が薄れます。食前に祈るだけ、あるいは単に同じ言葉を繰り返し祈るだけになります。「また祈りが聞かれなかったら……」と恐れて、本当の願いを主に打ち明けなくなります。そしてついに、神との会話が一切なくなります。

少し時間を取って、ご自身の祈りや神との関係性を振り返ってみましょう。神との会話が形式的だったり、その時間が減ったり、冷たくなったりしているとしたら、表面上どうであれ、実は心の奥深くで神に失望しているのかもしれません。

- 「神が娘の病気を治してくださると信じて祈りました。しかし結局、ガンとの闘いに敗れて亡くなってしまいました。悔しすぎて現実を受け止められません」
- 「悲惨な家庭環境で育ち、誰も助けくれませんでした。いまさら誰を信じられるのですか。神はただ黙って見ているだけだったのですか。祈ろうとするだけで、人にも神にも怒りや恨みが湧いてきます」
- 「ずっと祈りたいと思っています。今日こそは祈ろうと思うのに、できずじまいの繰り返し。そんな自分にうんざりです」

一旦こじれた人間関係を修復するには、誠実さと勇気が必要です。神との関係も同じです。まず問題を認め、失望と向き合い、神への信頼を回復するのです。あなたがそのプロセスを進むために、本書が助けになることを願っています。

本題に入る前に、少し個人的なことを書かせてください。私自身これまで多かれ少なかれ心痛む失望を経験してきました。その内の一つは、孫のネイサンのことです。免疫機能不全という障害をもって生まれたので病気への抵抗力がなく、何度も気管支炎になりました。私たち家族は苦しむ彼を見守ること以外、何もできず、無力感に苛まれました。もちろん必死に祈りましたが、神が私たちの願いに応えてくださ

るようには思えませんでした。ネイサンは何度も入院し、その度に家族は胸が張り裂けそうな日々を過ごしました。この愛しい幼子のための必死の祈りを、神は聞いてくださらないのか。いや、そもそも、神は私が信じていたようなお方ではないのか……。

主治医からは、同じような病気の子どもの6割は3歳前後で免疫機能が働き始めると言われました。希望はありますが、裏を返せば残りの4割はその後も免疫機能がないまま、ということです。何度も感染症に苦しむ幼い孫を見て、私はただただ祈りました。

最初の頃は「もしまた感染症にかかったら？ もし免疫機能が働き始めなかったら？ もしこの子が取り去られたら？」など不安や心配が募るばかりで、祈るたびに疲れ果てていました。ところが徐々に、祈りの焦点が変わっていきました。恐れや不安はもちろんありますが、以前ほどではなくなりました。言葉数は減り、時には沈黙の中で、ネイサンの命運について葛藤しました。そしてついに、神にただこう伝えました。「主よ、最善をなしてください。何がネイサンにとって最善か、それをご存じなのはあなただけです。私はあなたを信頼します。あなたが良きお方だと信じます。もちろん、あなたがネイサンを癒やしてくださるよう心から願っています。でも、私



「神のご臨在の中にいると、このお方に何かを要求するなどとてもできない、と感じます」
フランシス・A・シェーファー

の願いではなく、みこころがなりますように」

ネイサンが3歳になる頃には感染症の頻度が減ってきました。検査の結果、ただ神のあわれみによって、彼が免疫を獲得し始めていることが判明しました。

自分ではどうにもできない状況は、神への信頼を学ぶ「祈りの学校」でした。答えられた祈りについて喜びつつ感謝することも、かなえられない祈りの背後に神の知恵があることも学んできました。また、祈りの答えを待ちつつ神との交わりを楽しむことを体験しています。

とはいえ今も、祈りに失望していることがあります。エリヤのように、自分も祈りで天候を実際に変えられたらなあ、と思うこともあります（ヤコブ 5:16-18）。しかし、いろいろな経験をしながら、確信を持って祈ることを学んできました。それは自分の願いを神に一方的に並べ立てることではありません。むしろ、単純ながら奥深い、いくつかの原則によるのだと分かってきました。これらの原則は、言葉の巧みさやいわゆる「あの人は靈感がある、霊的に敏感」などと言われるようなものとは無関係です。主が「祈りの学校」で教えてくださる五つの原則を順に見ていきましょう。



第二章

基本に戻る

1. 仲介者を通して神に近づく

神は私たちに、イエスという仲介者をお与えになりました。私たちは神をなかなか信頼できません。しかし神はそんな私たちを無視してよいと思われず、仲介者をお立てになりました。神と人との橋渡しをするために、ひとり子イエスを送られたのです。このイエスは私たちの現状を理解し、同情してください。同時に、天の御国を代表するお方でもあります。

イエスは私たちに徹底的に寄り添い、私たちの問題を文字通り「自分事」としてくださったゆえに、ついに「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マルコ 15:34）と叫んで果てられました。しかし3日後、この仲介者が死に勝利されたと明らかになります。ご自身の大きな犠牲をもって、仲介者イエスは神と私たちとを隔てる壁を取り除いてくださいました。

それでもなお、私たちは罪を犯すでしょう。欲望や不健全

なプライドによって道を踏み外すことがあるでしょう。自己憐憫（れんびん）にとらわれたり、人生の嵐に神を見失ったりすることもあるでしょう。しかし、父なる神の愛に疑う余地はありません。「父なる神と言っても、本当にあなたのことを気に掛けているの？ 実は裏切ったりしない？」という声が内外に起こっても、心はなびきません。私たちが御顔を求めるよりもずっと切実な思いで、神の方が私たちとの会話を切望しておられます。ですから、確信を持って「パパ！ お父さん！」と祈れます。

イエスの仲介がなければ、神が祈りに耳を傾けてくださるかどうかが、常に疑心暗鬼でしょう。困難な状況に置かれると「神は私のことなど何とも思っていない！」と考えるかもしれません。しかし、仲介者イエスが十字架上で成し遂げられたことを思い出しましょう。私たちはこのお方のおかげで安心して祈り、神に近づけるのです。それも罪人としてうなだれながらではありません。自分自身の肩書きや業績、名声によって神のお近づきになる、というのでもありません。語彙や表現力の豊かさで神の歡心を買う、というのでもありません。私たちが神の御前に出られるのは、ただ仲介者イエスゆえに他なりません。イエスはご自分の血潮で私たちの罪の報いをすべて引き受けてくださいました。このお方の御名で、私たちは神の御前に進み出るのです。

すでにささげられたいけにえを信じる。 私たちがこのように神に近づけるよう、神はずっと前から計画しておられました。それは仲介者イエスがこの地に来られる以前から、イスラエ

ル人の礼拝に現れていました。幕屋や神殿は神の臨在の象徴で、いけにえをささげる祭壇の火は絶やしてはならないとされていました（レビ記 6:12-13）。何世紀もの間、人々は神の定めに従い、血なまぐさいいけにえを通して神の前に進み出ていました。しかしキリストの受肉と苦しみを経てはじめて、それらが御子イエスの受けられた暴力と死を示していたことが明らかにされました。

幕屋や神殿には香をたく祭壇もありました。香り芳しく立ち上る煙は神を喜ばせる祈りの象徴ですが、いけにえの祭壇から取られた炭火が使われたでしょう。つまり、私たちが神に近づくためのいけにえと祈りとは切り離せないのです。

この結び付きこそ、仲介者イエスが私たちのために確立してくださったものです。神に受け入れられるいけにえとなられたイエスは、私たちがご自身の御名で祈ることで神の御前に出られるよう、背中を押してくださいました。この確信をもとに、ヘブル人への手紙の著者は次のように記します。

さて、私たちには、もろもろの天を通られた、神の子イエスという偉大な大祭司がおられるのですから、信仰の告白を堅く保とうではありませんか。私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでしたが、すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった

助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。(ヘブル 4:14-16)

「大祭司の恵みの御座に近づく」とは、城や王宮の重々しい扉をくぐり、王や皇帝、将軍の待つ謁見（えっけん）の間へ特別に招き入れられるようなものです。ヨーロッパでもアジアでも、謁見の間はその国で最高の贅（ぜい）が凝らされ、脇には従者たちがずらりと控えていました。いきなりそんな所に入ったらとても恐れ多くて、緊張でガチガチになってしまふでしょう。祈りによって神に近づくのも、似たような感覚かも知れません。しかし、私たち一人一人のことをよく分かっておられるキリストの仲介のおかげで、「招かれざる客」になることを恐れる必要はありません。いつでも安心して神の御前に進み出ることができます。王家の紋章が押された招待状があるのですから、いつでも、どこでも、どんな問題も必要も祈れます。「恵みの御座」に招かれているからです。恵みとは全く分不相応な心遣い、ただただ一方的な助けです。これこそ、仲介者イエスが犠牲を払って与えてくださったものです。

とりなし続けてくださるお方を信じる。 私たちが今日も「恵みの御座」に進み出ることができるのは、仲介者イエスの働きが続いているからです。今この時もイエスは、神の右の座で私たちのためにとりなし続けてくださいます(ローマ 8:34)。ご自身がささげられた犠牲によって、主イエスは私たちの代弁者となりました。父なる神とともに王座に着き、私たち

のためにとりなしておられます。使徒ヨハネはこう言っています。

私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。しかし、もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の前でとりなしてくださる方、義なるイエス・キリストがおられます。この方こそ、私たちの罪のための、いや、私たちの罪だけでなく、世全体の罪のための宥（なだ）めのささげ物です。（1ヨハネ 2:1-2）

これでもなお、祈りを躊躇（ちゅうちよ）したり、自分に祈る資格がないと言えるでしょうか。私たちのためにご自身を犠牲にしてくださり、今も父なる神にとりなしてくださるイエスがおられます。

2. 自分に正直になる

神は「本音トーク」を好まれます。真実なるお方は現実を直視し、暗闇や欺きを嫌われます。暗闇は、神に敵対するものの領域です。ですから、確信を持って祈るには、自分に正直にならなくてはなりません。神は、私たちの不満や愚かさ、恐れや失敗に動じるようなお方ではありません。私たちが怒ったり困惑したり、幼児のように駄々をこねたりしても大

丈夫。うろたえも慌てもされません。

神が喜ばれないのは「恵み」「祝福」「みこころ」といった敬虔（けいけん）に聞こえる言葉を、深く考えることなく習慣として並べた祈りです。聞こえはよくても真実味に欠いた、当たり障りのない社交辞令のような祈りを退けねばなりません。祈りの基礎を真と誠実さに置きましょう。

信仰深く聞こえても内実のない祈りは本音を反映していないばかりでなく、神に受け入れられません。だから、謁見の間に入り確信を持って祈るために、正直であることを学びましょう。まず、自分自身を吟味して罪を告白する時間を取る必要があります。もし神に対して否定的なイメージや感情があれば、それをも打ち明けましょう。セルフイメージ、人間関係の問題、生活の必要、不満、願い、過去のつらい経験についても腹を割って神に話すのです。自分が本当のところ神のみこころを理解したいのか、それに従いたいのか、正直に話さなければなりません。もしみこころを行いたくないなら、隠さずにそう認めましょう。そうすれば、反発心や愚かさを乗り越えられるよう、神に助けを求められます。

自分自身を知るために与えられる神の助けを信じる。人の心をすっかりご存じの主は、自分の本当の姿を知りたいと願う人に、それぞれの内面をより深く理解させてくださいます。



**聞こえはよくても
真実味に欠いた、
当たり障りのない
社交辞令のような
祈りを退けねばな
りません。**

詩篇の作者は「主よ あなたは私を探り 知っておられます」と記しています（詩篇 139:1）。ダビデはソロモンに「主はすべての心を探り、すべての思いの動機を読み取られる」と語りました（1歴代誌 28:9）。

「私の本当の姿を照らしてください」と祈りつつみことばと向き合うとき、自分の内面の動きをごまかさずに見ることができます。聖書は、私たちの心の奥底にある感情を引き出し、真の動機を示してくれます。心のひだのうちに隠していた恨み、密かな憎しみ、苦々しい思いを照らし出してくれます。正直に祈ることでこのような思いの存在を認め、正体を見極め、それに対処する助けを神に求めることができます。

私たちは自分に不都合なことをいつの間にか否定したり、心の奥に押し込んでフタをしたりします。「私の心を照らしてください」と祈るなら、神は答えてくださいます。機会を捉えて徐々にそのフタを開け、自分の本当の姿を見せてくださいます。それは痛みの伴うプロセスですが、さまざまに配慮して、私たちが耐えられるよう守ってくださいます。

- 神は心の古傷を示されることがあります。それを適切に取り扱い、最終的には忘れることができるようにしてくださいませ。
- 神は果たしていない約束や、償わなければならない負い目を思い出させてくださることもあります。
- 神は自分がかつて誰かに与えた痛みを思い出させ、過去を清算するように命じられることもあります。
- 神はこじれた人間関係を修復したり、誰かを赦（ゆる）

すよう導かれることもあります。

自分の内面を知ることは神の素晴らしい賜物で、解放をもたらします。主の前に自分を繕わず、正直になることで頂けるものです。

正直な自己省察は私たちの暗部を照らすだけではありません。神からいかに多くの祝福を受けているかにも目を開かせてくれます。神はいつも私たちの心の内で働き、さまざまな御業を行っておられます。ご自身の素晴らしさを示し、恵みで満たし、逆境において成長を促し、試練に耐える力を与え、誘惑から逃れる道を備え、ご自身の平安を与えてくださいます。生活の雑事に追われ、もろもろの責任に翻弄（ほんろう）されていると、このような祝福に無頓着なことがままあるのです。

正直な人を赦される神を信じる。 野球の試合で、9回裏同点、ツーアウト満塁の場面でした。三遊間に鋭いゴロが飛びましたが、新人ショートはボールをはじいてしまいます。その間に3塁走者がホームイン。サヨナラ負けです。同じようなゴロをこれまで何千回も処理してきましたが、今回はエラーでした。

こんなとき、つい言い訳をしがちです。イレギュラーバウンドだったから、太陽がまぶしかったから、あるいは芝が濡れていたから……。しかし試合後、彼の口から出たのは言い訳ではありませんでした。「すみません、自分のミスです。完全に僕のエラーです」

神に対して、私たちはこのような姿勢が必要です。主に罪

を示されたとき、その指摘を認め、自分の言葉で言い表した上で、神が赦（ゆる）しを与えてくださると信じなければなりません。

ダビデとナタンのお話を覚えていますか。権力に心を毒されたダビデは、戦争を将軍たちに任せ、王宮に留まっています。沐浴（もくよく）するバテ・シェバに欲情し、王宮に連れ込んで姦淫（かんいん）した揚げ句、その夫を殺させ、自らの罪を隠ぺいしようとしていました。首尾よく片付いたかのように思いましたが、預言者ナタンが面と向かい「あなたがその男です」（IIサムエル記 12:7）と明確に批判しました。

何日も、いえ、おそらく何カ月もの間、自分の行いや本当の姿から目を背けて暗闇に留まり続けたダビデは、ようやく自分の罪を認めました。彼が詠んだ詩篇 51 篇は心を打つ悔い改めの祈りで、主への告白です。「まことに私は自分の背きを知っています。私の罪は いつも私の目の前にあります。私はあなたに ただあなたの前に罪ある者です。私はあなたの目に 悪であることを行いました」（詩篇 51:3-4）。かつての喜びを回復してほしいと願うダビデの祈りに、神は赦しをもって応えてくださいました。聖書と聖霊、そしてともに生きるキリスト者の仲間が、今日の私たちに罪を指摘するナタンです。

世の中はますます冷たくなり、良心や思いやりはあまり重んじられません。真偽も善悪も相対的なものでしかないと見なす傾向が強まっています。国家や政治家、企業が権力や立場を悪用して不正をもみ消し、情勢が悪くなると口先だけの弁解をします。教会、職場、家庭、町内会などいろいろな

ところで、空気を読んで和を保つことを優先するあまり、正しさや誠実さが二の次になりがちです。面倒な現実と向き合うのを避け、曖昧な言葉ではぐらかしやすいのが、実に私たちの姿ではないでしょうか。自分や仲間が幸せに暮らせればいいという願いの裏に、その輪の外にいる「隣人」がどうなるかは考えない、という冷淡さが潜んでいないでしょうか。

こんな硬く冷たい心を持つ私たちはどうすればよいのでしょうか。「砕かれた霊」、「砕かれた心」を持ち（詩篇 51:17 参照）、主にいつでも受け入れられる者となるには、どうしたらよいのでしょうか。それは、そのように祈り求めることによってです。「神よ 私にきよい心を造り 揺るがない霊を私のうちに新しくしてください」（詩篇 51:10）。神はその願いを尊いとみなしてくださいます。「神様、罪人の私をあわれんでください」（ルカ 18:13）と祈る者をないがしろにはなさいません。

神が私たちの不満を取り扱ってくださると信じる。人間関係には意見の相違、葛藤、そして衝突がつきものです。何も起こっていなければ、それは誰かが自分の気持ちを押し殺して問題を先送りしているだけでしょう。相手との絆を本当に深めたいなら、否定的な感情も率直に打ち明けて話し合い、違いを乗り越えようと努力するでしょう。神との関係も同じです。祈りの中で敬意を持ちつつ神に反論し、疑問をぶつけ、



**罪を犯したとき、
神の御前でその過
ちをただすために
は、まず自分が間
違っていたことを
正直に告白しなけ
ればなりません。**

議論することさえ許されています。

ユダヤ教のラビ、ジョーゼフ・テルシュキンは、神と真正面から本音で対決するのは、ユダヤ人が脈々と受け継いだ姿勢だと書いています。「人が神と議論するのはヘブル語(旧約)聖書、そしてユダヤ教そのものの特徴になった。アブラハムの時代から数百年後、詩篇の筆者は神に怒りをぶつけて叫んでいる。『起きてください。主よ なぜ眠っておられるのですか。目を覚ましてください。いつまでも拒まないでください。なぜ 御顔を隠されるのですか。私たちの苦しみと虐待をお忘れになるのですか』(詩篇 44:23-24 神のなさることに疑問を持った預言者や義人の例として、ハバクク書 1:2 とヨブ記全体も参照)。全能の神に立ち向かい声を上げるのは、神も人間と同じように責任を負い、それを果たさなければ非難の対象となると信じるからだ。この伝統を受け継ぐユダヤ人として、エリ・ヴィーゼルは次のように述べる。『ユダヤ人は神を愛し、神と争う。しかし、このお方を無視はしない』」

この姿勢はアブラハムにも見いだせます。邪悪の町ソドムを滅ぼそうとされる神に向かって、彼は 50 人の正しい人がいればその町を滅ぼさないでほしい、と請いました。さらに彼は根気よく神を説得して、その人数を 10 人にまで減らしましたが、それでも条件は満たされず、ソドムは滅ぼされました(創世記 18:23-19:29)。

モーセも神のおっしゃることに反対しました。主は次々に奇跡を起こし、イスラエルの民をエジプトでの奴隷生活から導き出し、荒野で彼らを養われました。しかし、モーセがシ

ナイ山の上で神から律法を受け取っている間に、彼の同胞は自分たちをエジプトから解放してくださった神を捨てようとしていました。神から直接聞いた十戒（出エジプト記 20 章）を破り、金の偶像を作り、豊穡（ほうじょう）を求める異教の礼拝のように性的放縦にふけりました。神はモーセにおっしゃいました。「今は、わたしに任せよ。わたしの怒りが彼らに向かって燃え上がり、わたしが彼らを絶ち滅ぼすためだ」（出エジプト記 32：10）。神は、ゼロからやり直して、モーセから大いなる国民を興す、とまで言われました。

モーセはその提案に反対し、民を救うために嘆願しました。「どうしてエジプト人に、『神は、彼らを山地で殺し、地の面から絶ち滅ぼすために、悪意をもって彼らを連れ出したのだ』と言わせてよいのでしょうか。どうか、あなたの燃える怒りを収め、ご自身の民へのわざわざを思い直してください」（12 節）。神は下そうとしていたわざわざを思い直され、民は救われました（14 節）。

アブラハムとモーセは私たちの模範です。「こんなこと本当に言っているのか」と思うようなことも、神を畏れ敬いつつ、思い切って投げかけていいのです。例えば……

- 夫や子どもの救いのために何十年も祈ってきました。それなのにどうしてまだ答えてくださらないのですか！
- 娘の命を助けてほしいと必死に祈ったのに、彼女は死んでしまった！これからどうやって生きていけばよいのか……。あなたのことも、もう信じられません。
- いつまで失業生活が続くのですか！ 職探しを続ける気力

がどんどんなくなってきて、ただただ不安と焦りが増すばかりです。

- このまま子どもを授からずに年を取っていくなんて! 友達には2人、3人と与えられていく。あなたは不公平な神なんですか!

神は私たちの激しい感情に圧倒されたりはなさいません。逆上したり、自己弁護をしたりもされません。指摘されて困るような落ち度は何も無いからです。神は、私たちが自分自身をさらけ出せるよう助けてくださいます。自分でもつかみがたい本当の思いや感情が照らし出されれば、どのように対処するのがよいか、神に知恵や助けを求めることができます。

私たちはどうして神の御前で正直になれないのでしょうか。そもそも、私たちは争いを避けようと、家族や友人にさえ否定的な思いを伝えません。まして神に文句を言うなんて不信仰、と考えるかもしれません。



「神から答えを得るために祈るのではありません。神と完全にひとつになるために祈るのです」オズワルド・チェンバーズ

愛情は葛藤や不一致、議論と両立しない、という世間の常識にいつの間にか流されていないでしょうか。波風を立てず和を保つのが良い人間関係だと。しかし相手のことを真剣に考え、心を配るからこそ葛藤し、異を唱え、話し合うのではないのでしょうか。雰囲気が悪くなったりいざこざが起きたりするリスクを承知で、それでも面と向かって本音で話す勇

気こそ、さまざまな人間関係を強め、深めるものです。神との関係においても同じです。ヤコブのように、時には神と格闘すべきです。そこに神からの祝福があるでしょう（創世記 32：24-32）。

神が私たちのために望んでおられることを信じる。 イエス・キリストを信じる者は、思いと意志において神と一つになることを目指します。私たちの望みは神の望みと同じでしょうか。私たちの意志はみこころに沿うものでしょうか。神が願うものを、私たちは願い求めているでしょうか。祈りの中で自分の現実を直視し、吟味しなければいけません。

神との一致はどのように育むのでしょうか。もちろん、神のようにすべてのことを完全に理解はできません。しかし日常生活の必要や家族、健康、仕事、進路について祈るとき、イエスと同じ心構えをもって祈ることはできます。それは主の祈りに見られる次のような心構えです。「みこころが天で行われるように、地でも行われますように」（マタイ 6:10）

ご自身もその死の数時間前、この姿勢を示されました。ゲツセマネでの苦渋に満ちた祈りの中で、一度は十字架を逃れたいと御父に願う場面さえありました。しかし、最後はこう祈られました。「しかし、わたしの願いではなく、みこころがなりますように」（ルカ 22：42）。激しい葛藤の中で、自らの不安やためらいを隠さずに御父に訴えつつご自身を明け渡すことで、イエスは御父との一致に留まられました。

「みこころがなりますように」と祈ることに引っかけりを覚えるかもしれません。今までずっと祈り求めていたことを密か

にあきらめることにならないか。神が必ず答えてくださると確信して祈り始めたはずなのに、あの確信が偽物だったということにならないか。神がわざわざ私なんかのために御手を煩わせてくださるわけではない、という不信仰の裏返しじゃないか。そして、願いがかなわなかったときに「これがみこころだったんだ」と自分や周囲を納得させるための都合の良い逃げ道じゃないか……。もしこんなふうに考えているなら、全くのお門違いです。

ドイツの神学者のヘルムート・ティーリケは、こう書いています。「『みこころが行われますように』というのは、そんな意味ではない。それは『あなたは私以上に、私の祈りを理解してください』という意味なのだ(ローマ 8:26 参照)。『あなたは私に今必要なのが空腹なのか、パンなのかを最もご存じなお方です。何が与えられても、私は「主よ。そのとおりです」(マタイ 15:27) と申し上げます。それが何であれ、あなたが与えてくださるあらゆることを通して、私の願いも理解も超えて、あなたが私を満たしてくださいと知っているからです』

「みこころがなりますように」と祈るとき、私たちは神のお考えや思いを自分自身のものにすると決断しているのです。イエスが弟子たちに言われた「わたしの食べ物とは、わたしを遣わされた方のみこころを行い、そのわざを成し遂げることです」(ヨハネ 4:34) というみことばを、自分自身の祈りとして神に申し上げているのです。そして、主のゲツセマネでの祈りに倣うのです。今日の糧や仕事、そして伴侶や子ども

が与えられるか否かにかかわらず、神のみこころが神の方法で成ることが最善です。

神と自らの思いが一致しているという確信を得るには、まず自分のうちにある本当の思いを正直に認めなくてはなりません。裏表のない心を持つことは、失望を乗り越え、確信を持って祈るための土台です。

3. 言いたいことを一方的に言うのではなく、神と語り合う

多くの人が確信を持って祈れない理由の一つは、誰も自分の祈りを聞いていないように思えるからです。あたかもディスプレイを見つめて集中している上司や、スマホゲームに没頭する子どもに話しかけている気分になります。せめて形だけでも相づちしてくれればいいのに、聞こえているのかも分かりません。全くの無反応。

こうなると、祈りは空虚な儀式としか思えず、神が一人一人に深く思いを寄せてくださるという真理を見失ってしまいます。事実、神は私たちの祈りに一言半句、真剣に耳を傾けておられるにもかかわらず、です。そもそも祈りは、愛情深い生ける神との間になされる、時に丁々発止なやり取りです。アメリカの牧師A・W・トーマーは著書『神への渇き』で次のように述べています。「私たちは、神が人格であること、したがって神は私たちと交わりをもつことができるということ

を、ほとんど忘れてしまった」。神が祈りを聞いておられないと感じるときは、祈りの根幹に関わる二つの点を思い起こさなければいけません。

確信を持って神に耳を傾ける。 祈りとは、単に神への一方的

的な語りかけではありません。神が聖書を通して語られたこと、今も語り続けておられることへの思慮深い応答です。だからみことばは、神と私たちが対話を重ねる上で欠かせません。

神との対話を深めるために、適当な詩篇、あるいは新約聖書の書簡の一部を開くのも有益です。神のお考えや思い、価値観についてその箇所が何

を伝えようとしているか、注意深く読みましょう。聖霊を通してその箇所を書かせたお方の意図を丹念に、畏れつつ聴き取りましょう。神の心のうちにある関心や願いを示してください。示されたことについて、祈りの中で正直に、神にお応えしましょう。そのような対話を続けるうちに、神は何を大切だとお考えなのか、徐々にはっきりしてくるでしょう。同時に、神があなたの心の中でどのように働かれるかも分かってくるでしょう。

ある人が、コリント人への手紙第一 13 章を読み、祈りのうちに神との対話を深めるとしましょう。愛についての神の御思いを知ったなら、例えば自分の夫婦関係に照らし合わせ、何かを変えようとするでしょう。「愛は寛容であり」(4 節)



自分が一方的に話しているなら、神の語りかけに耳を傾けることはできません。

という箇所から、自分が相手をいかにぞんざいに扱っていたかが照らし出され、みこころにそぐわない言動を続けていた事実に関心を痛めるかもしれません。これを境に根本から考えを改めるなら、伴侶への態度や言動を変えていくでしょう。

17世紀フランスの神学者フランソワ・フェヌロンは、次のように書いています。「静まりなさい。神に耳を傾けなさい。御声を聞くために心を整えなさい。そうすれば聖霊は、神を喜ばせる方法をたましいに教えてくださいます。この世のあれこれについての思いや人間的な思惑がすべて静まって、ようやく、御声を聴くことができます」

音声として聞こえる声ではないかもしれませんが、その時には、御声だと分かるはずで、直面する状況や困難について、聖霊がみことばの真理を優しく、温かく、そして迫るように語られるのを聞くでしょう。

孫のネイサンの病状がとても深刻だったある晩、私は起きて、孫のために祈っていました。祈りのうちに主の前で静まっていると、ふと、自分が妻の意向を何年も無視していたことに気付いたのです。私の態度のどこがみことばやみこころに沿っていないかが分かりました。彼女の思いをずっと踏みにじっていたのだと、ようやく認識したのです。私は神に赦（ゆる）しと助けを求め、翌朝から、示されたことに従って妻への態度を改めました。それは、私たち夫婦の関係を大きく変えました！ですから、自分の経験からも確信を持って次のように言うことができます。御前で静まるときに神は語ってくださる、と。

確信を持って神に応答する。神に聞くなら、私たちは言葉のみならず行動でも応答するようになります。言葉での応答ははじめの一步に過ぎません。たとえば、コリント人への手紙第一 15 章を読めば、復活の勝利とそれに伴う希望のゆえに神をほめたたえるでしょう。しかし、私たちの応答は賛美の言葉に留まりません。サタンはすでに敗北していると知るなら、誘惑に確信を持って立ち向かえます。終末期を迎えている人にも、希望を語ることができます。嵐のような日々立ち向かう力が与えられます。罪深い態度や習慣をやめる自制心も与えられます。



**「すべきことが分
かっているのにそ
れをせず、しない
ことの言い訳とし
て祈るのはやめま
しょう」 オズワル
ド・チェンバース**

祈りと行動への心構えは車の両輪です。私たちの祈りがみことばや神のみこころに深く根ざせば根ざすほど、それに応答する行動はより大胆で思い切ったものになるでしょう。困難な人の家に行って料理や掃除を手伝う、過去に傷つけられた（あるいは傷つけてしまった）人との関係修復を図るなどはそのほんの一例に過ぎません。神に応えようとする、自分の立てていたプランががらっと変わるかもしれません。思いもよらぬところで、自分ができるともしたいとも思わなかったことをするかもしれません。私たちが神に祈るからです。このお方はじっとして何もしない神ではありません。生ける神です。このお方に祈り、語らい、お応えするとき、

神は驚くべき御力をもって私たちの歩みに介入し、思いもよらない劇的な方法で私たちを変えられます。あるいは、今はその場にそのまま留め置かれるかもしれません。いずれにしても、私たちは最善をご存じの神に全幅の信頼を置いて祈り、そのお方のみこころに応答するのです。

自分の必要と願いを携えて御前にひれ伏すとき「祈り始めたのは自分だ」と思うでしょう。しかし、あらゆる祈りは神への応答ではないでしょうか。これはノルウェーの神学者O・ハレスビーが著書『祈りの世界』で教えていることです。彼は「見よ、わたしは戸の外に立ってたたいている」（黙示録 3:20）というイエスの言葉が祈りの扉を開く鍵だと考えます。イエスはさまざまな出来事や状況によって私たちの心を「ノック」し、私たちはそれに促されて祈るのだ、と。そう考えると、私がネイサンのために祈ったのは、神への応答でした。イエスは孫の状況を通して、私の人生の扉をたたかれたのです。

4. 神の視点に自分を合わせる

あなたも似たような経験をしたことがあるはずです。パソコンが壊れてしまい、修理を依頼するためにコールセンターに電話しました。「少々お待ちください」と愛想のよい受け答えの後、音楽が流れ始めます。少しすると保留音が途切れて「担当者におつなぎしています。もうしばらくお待ちください」というメッセージが流れ、保留音が再開しました。で

も2分、5分、そして10分……。本当につながるのかとイライラしてきます。いっそ電話を切って、近くの家電量販店にパソコンを直接持ち込もうかと思いました。

私たちの祈りも、ずっと保留されているように感じる場合があります。神は予想を超えたすばらしい計画を進めてくださっているのかもしれませんが、ずっと切望している深い願いはかなえられないまま。神は祈りという「電話口」のすぐ向こうにおられるのに、応答してくださらないのです。

旧約聖書のハンナも神に拒絶されているという心情を味わいました（1サムエル記 1:1-18）。彼女の夫エルカナにはもう1人の妻ペニンナがおり、彼女には子どもがいましたが、ハンナは不妊でした。当時、子どもがいないことは神に受け入れられていない証しだと見なされていました。しかも、毎年主の宮にいけにえをささげに行く度に、ペニンナはハンナに子どもがいないことをあざけりました。

ハンナが敬虔（けいけん）な信仰者だったにもかかわらず、その苦悩は何年も続きました。どれほど祈り、祈り、祈り抜いても、神は答えてくださいません。ある年、主の宮に上った彼女は我を忘れるほど激しく泣きました。しまいには酒に酔っていると勘違いした祭司エリに諭されてしまいます。

しかし、ハンナの物語はここで終わりません。神はご自身のお定めになった絶妙のタイミングで、彼女に息子を与えられました。その子はサムエルと名づけられ（1サムエル記 1:19-20）、後には祭司、また預言者として歴史に名を残しました。

神はご自身の決めておられたタイミングで「主に受け入れ

られていない」という彼女の苦悩を喜びに変えられました。喜びにあふれた彼女の賛歌（2:1-10）を読むと、彼女の最奥の願いは子どもを授かることではなかったことが分かります。彼女は自分が神に受け入れられ、認められていると確信したかったのです。ハンナの悔しさは喜びへと変えられました。彼女の経験から学べるのは、祈りがすぐに答えられるかどうかは重要ではない、ということです。大切なのは、神の知恵とタイミングを謙虚に待つことです。

ハンナの経験だけでなく聖書全体が、自分の思いではなく神の知恵に信頼し、委ねるべきさまざまな理由を教えています。

神の視点を信じる。人間には物事のほんの一部しか見えません。全体像を把握することは不可能です。仮に私たちが全体像を理解したら、必死に願い求めてきたものが実は、自分にも、自分の大切な人たちにも必ずしも益にならないと悟るでしょう。祈り求めたことすべてがその通りになかなかつたことを、私は何度神に感謝したことでしょう。さらに「私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります」（1コリント 13:12）



「天に召されてはじめて、時に祈りをかなえないということが神からの最も真摯な答えだったと知り、私たちは主に感謝をささげるだろう」

P・T・フォーサイス

と言われているとおり、物事の全体像を理解できるのは御国に行ってからだとわきまえて祈っていたら、もっと違う人生を歩めたかもしれません。イギリス

の牧師、神学者P・T・フォーサイスはこう述べます。「天に召されてはじめて、時に祈りをかなえないということが神からの最も真摯（しんし）な答えだったと知り、私たちは主に感謝をささげるだろう」

神の知恵を信じる。神は私たちの真の必要をご存じです。家計の苦しいシングルマザーが「20万円を与えてください」と祈りました。神はこの祈りにそのままお答えにはなりませんでしたが。現金ではなく、彼女の状況に合う仕事をお与えになりました。家計の上手なやりくりを教えてくれる友人もお与えになりました。彼女は後で、自分のあの祈りが答えられていたと気付きました。神はご自身の知恵を持って、思慮深く祈りに答えておられたのです。何よりも、ここまでの歩みを通して、神は彼女のうちにご自身への信頼を育んでくださいました。

神のタイミングを信じる。家を売りに出しても、買い手がつくのに予想以上の時間がかかるかもしれません。また、赤ちゃんは予定日より2週間早く生まれたりします。しかし、神は常に最善のタイミングをご存じで、人生の複雑な出来事すべてを調和させていただきます。

神が良き方だと信じる。配偶者が自分をもっと大切にしてくれるように、と長年祈っている人がいます。しかし、神はまず、相手の悪口を言いふらすのをやめるよう導かれませんか。

自分を傷つけた相手が心から反省して謝罪していても赦（ゆる）したくない、自分の思いに固執して離れられない、神との歩みを損なうほどの激しい怒りにとらわれている……。

このような状況で、祈りは答えられないでしょう。「自分の快樂のために使おうと、悪い動機で求める」祈りも答えられないでしょう（ヤコブ 4:3）。自分の内側を吟味し、罪を告白し、悔い改めてはじめて、その祈りは答えられます。

イギリスの伝道者で教師でもあったオズワルド・チェンバースは、答えを待つことも祈りの一部だと理解していました。「いつでも祈るべきで、失望してはいけない」という聖句（ルカ 18:1）についてこう述べます。「イエスは弟子たちに忍耐強く祈ることを教えられた。神の前に正しく歩んでいるのに祈りの答えがなくとも、このお方を誤解してはならない。不親切な友、冷淡な父、あるいは不公平な裁判官などと思わず、祈り続けなさい。確かに『求めれば与えられる』のだから、あきらめてはならない。あなたの天の父がすべてを説明してくださる日は、然るべき時に必ず来る。なぜ今ではないのか。あなたの人格や品性を練るためだ。『そんなことはどうでもいい。ただ願いをかなえてほしい』とあなたは訴えるかもしれない。しかし神は答えられる。『私はあなたの知識と理解をはるかに超える業を行っている。ただ、私を信じなさい』」

詩篇記者アサフは詩篇 73 篇で、神が自分よりずっと大きな視野をお持ちだと思い出し、幻滅を乗り越えました。

まことに 神はいつくしみ深い。イスラエルに心の清らかな人たちに。けれどもこの私は 足がつかずきそうに 私の歩みは滑りかけた。それは 私が悪しき者が栄えるのを見て 誇り高ぶる者をねた

んだからだ。実に 彼らの死には苦痛がなく 彼らのからだは肥えている。人が苦勞するときに 彼らはそうではなく ほかの人のように 打たれることもない。……ただ空しく 私は自分の心を清め 手を洗って自分を汚れなしとした。私は 休みなく打たれ 朝ごとに懲らしめを受けた。もしも私が「このままを語ろう」と言っていたなら きっと私は あなたの子らの世代を 裏切っていたことだろう。私はこのことを理解しようとしたが それは 私の目には苦役であった。ついに私は 神の聖所に入って 彼らの最期を悟った。まことに あなたは彼らを滑りやすい所に置き 彼らを滅びに突き落とされます。ああ 彼らは瞬く間に滅ぼされ 突然の恐怖で 滅ぼし尽くされます。目覚めの夢のように 主よ あなたが目を覚ますとき 彼らの姿を蔑（さげす）まれます。私の心が苦みに満ち 私の内なる思いが突き刺されたとき 私は愚かで考えもなく あなたの前で 獣のようでした。しかし 私は絶えずあなたとともにいました。あなたは私の右の手をしっかりとつかんでくださいました。あなたは 私を諭して導き 後には栄光のうちに受け入れてくださいます。あなたのほかに 天では 私にだれがいるでしょう。地では 私はだれをも望みません。この身も心も 尽き果てるでしょう。しかし 神は私の心の岩 とこしえに 私が受ける割り当ての地。見よ あなたか

ら遠く離れている者は滅びます。あなたに背き 不実を行う者を あなたはみな滅ぼされます。しかし私にとって 神のみそばにすることが 幸せです。私は 神である主を私の避け所とし あなたのすべてののみわざを語り告げます。(詩篇 73:1-5、13-28)

5. 神との交わりを楽しみながら待つ

アサフにとって神を信頼するとは、単にその知恵に自らの命運を委ねる以上のことでした。確信を持って祈るもう一つの秘訣は、祈りの答えを待ちつつ神との交わりを楽しむことです。神に願い求めているものが何であれ、このお方を知るといふ特権には比ぶべくもありません。神ご自身を知ることが最高の喜びです。

もちろん問題の大きさに圧倒され、失望や悲しみに押しつぶされそうなきときもあります。ハンナのように、一向に祈りが聞かれず心が折れてしまうこともあるでしょう。しかしまた、神が私たちのために働いておられることを知り、喜びにあふれる瞬間も少なくないでしょう。

神に関してすでに知っていることが正しいと信じる。 祈りの答えをまだ受け取っていなくても、神についてすでに知っていること、学んだこと、体験したことを喜ぶことができます。詩篇記者とともに感謝しつつ主の門に、賛美しつつその大庭

に入り、主に感謝し、御名をほめたたえることができるのです。(詩篇 100:4 参照)。

神に感謝する。あなたのために、神はどれほどのことをしてくださったでしょう。もし、通りすがりの人が面倒をいとわず助けてくれたら、言葉を尽くして感謝を伝えないでしょうか。神にも同様にしましょう。

私の神 主よ 私はとこしえまでも あなたに感謝
します。(詩篇 30:12)

イエスは父なる神に感謝をささげました(ルカ 10:21)。パウロの祈りは感謝で満ちています(エペソ 5:20 など)。私たちも、喜びつつ主に感謝をささげましょう。

神をほめたたえる。祈りに答えてくださるかどうにかかわらず、神を神としてほめたたえましょう。私たちのために成し遂げてくださったことに感謝しましょう。聖書は、主をほめたたえる言葉で満ちています。

ハレルヤ。主のしもべたちよ ほめたたえよ。主の御名をほめたたえよ。今よりとこしえまで 主の御名がほめられるように。日の昇るところから沈むところまで 主の御名がほめたたえられるように。
(詩篇 113:1-3)

詩篇 146 篇 1-2 節、ヘブル人への手紙 13 章 15 節、黙示録 4 章 11 節なども主への賛美です。祈りの中で神を賛美し、自分自身を神にささげ、深い愛を言い表しましょう。「この方

こそあなたの賛美」(申命記 10:21) です。

神の約束を信じる。 神との交わりを楽しむもう一つの方法は、祈る者に与えられた約束を再確認し、喜ぶことです。祈りについてパウロが書いた有名な箇所から、三つの約束を見いだすことができます。

何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。(ピリピ 4:6-7)

1, 神が平安を与えてくださるという約束。 祈りは不安の解毒剤です。自分の重荷を神の肩に委ねるとき、平安を与えてくださる。それが神の約束です(マタイ 11:28)。多くのキリスト者がそれを経験してきました。不安に押しつぶされそうな夜、重荷を主イエスに差し出すことで平安を得て眠ることができた、という証しには事欠きません(詩篇 4:8)。ですから喜びましょう。どんな不安や重圧、心配事でも主に委ね、平安を頂くことができるのですから。

2, 神が守ってくださるという約束。 祈るとき、私たちの考えや思いが守られます。主が私たちの砦(とりで)となり、敵の攻撃を防いでくださいます(詩篇 31:1-3)。神が私たちを確実に守ってくださることを喜びましょう。

3, 神が私とともにおられるという約束。パウロはこれを次のように表現します。「平和の神があなたがたとともにいてくださいます」(ピリピ 4:9)。人生の嵐が吹きすさぶ谷間を抜けるとき、あるいは深い孤独感が心をむしばむときも、祈るなら神がともにおられると確認できます。私たちが行くところどこでも、神がともにいてくださるという約束を喜びましょう。



第三章

みことばに根ざして祈る

神に用いられて聖書を記したのは、私たちのように何かを願ったり、失望したりした人々でした。彼らも人生の中で路頭に迷うことができました。私たち同様に、神の「沈黙」にくじけそうになりながら叫び続けました。身体的にも精神的にもギリギリの状況を通りました。さらに、心が壊れて感情があふれ出すようなこともありました。それでも最終的に神のうちに喜びと確信を再び見いだした彼らから、今日の私たちは多くを学ぶことができます。

私たちが失望や恐れに直面するとき、彼らの姿勢を通して自分の心を探り、祈りの手がかりとすることで、新たな希望を見いだすことができます。詩篇 42 篇は良い例です。飢え、渇き、打ちひしがれながら主に叫ぶ詩人は、自分の率直な感情を言い表し、見失っていた真理を再発見します。

詩篇 42 篇を数節ずつ引用し、それぞれに基づいた祈りの

例を示します。みことばに根ざして祈る参考にしてください。

鹿が谷川の流れを慕いあえぐように 神よ 私のたましいはあなたを慕いあえます。私のたましいは 神を 生ける神を求めて 渴いています。いつになれば 私は行って 神の御前に出られるのでしょうか。(詩篇 42:1-2)

主よ。このみことばはまさに、私の現状そのものです。私は渴き、疲れ、日々のあれこれにへとへとです。もう頑張れません、限界です。あなたが助けてくださらないなら、もう無理です。

いずれ必ずあなたの御前に出ることができると知っていますが、私は今、あなたの御声を聞きたいのです。私に何を求めておられるのですか。何をすればよいのですか。主よ、教えてください。

昼も夜も 私の涙が 私の食べ物でした。「おまえの神はどこにいるのか」と人が絶えず私に言う間。(3 節)

父よ、あなたはどこにおられるのですか。なぜ助けてくださらないのですか。今まで何の疑いもなくあなたを信頼し、人前で「主は忠実で信頼できるお方」と証しましたが、まるで自分がうそつきだったようで恥ずかしいと感じてしまいます。

私は自分のうちで思い起こし 私のたましいを注ぎ出しています。私が祭りを祝う群衆とともに 喜びと感謝の声をあげてあの群れと一緒に 神の家へとゆっくり歩んで行ったことなどを。(4 節)

以前はそうではなかったのです、主よ。あなたを信じる仲

間とともに、あなたとの交わりを楽しみました。ともに笑い、互いに祈り合いました。しかし、今は孤独です。あの喜びの日々は遠い過去のものです。

わがたましいよ なぜ おまえはうなだれているのか。私のうちで思い乱れているのか。神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。御顔の救いを。(5 節)

そうです、主よ、私も分かっています。あなたに叫び訴えていると「それでも、主は信頼できるお方だ」と心の奥底でささやくもう一人の自分がいます。そうです、あなたを信頼し続けるのが正しいと分かっています。この詩人のように、私もあなたの知恵に信頼します。あなたのタイミングで、私を助けてくださいます。喜びの日、あなたを心からほめたたえられる日は必ず来ると信じています。主よ、私はその日を心待ちにしています。

昼には 主が恵みを下さり 夜には 主の歌が私とともにあります。私のいのちなる神への祈りが。(8 節)

あなたの慈しみを味わえる日が、私の口にあなたの喜びの歌が与えられる晩が再び来ると、信じています。

私はわが巖（いわお）なる神に申し上げます。「なぜあなたは私をお忘れになったのですか。なぜ私は敵の虐げに嘆いて歩き回るのですか」(9 節)

父よ。あなたの助けが必ず来ると頭で分かっている、恐れが波のように何度も押し寄せます。あなたは私の巖、避けどころでいてくださると信じています。でも、自分は見捨てられている、独りぼっちだという感情を拭い去れません。あな

たの子どもである私が、なぜあなたを賛美する代わりに、悲しみに耐えなければならないのですか。

わがたましいよ なぜ おまえはうなだれているのか。なぜ私のうちで思い乱れているのか。神を待ち望め。私はなおも神をほめたたえる。私の救い私の神を。(11節)

そうです、主よ、それでも私はあなたをほめたたえます。あなたこそ私の唯一の希望です。あなたをほめたたえます、あなたが良いお方だからです。あなたを疑った私をお赦(ゆる)してください。あなたを待ち望みます。再び私を喜びで満たしてくださるあなたを、私は待ち望みます!

さまざまな状況のもとで祈るべき聖句

- 危険に直面しているとき（詩篇 91 篇）
- 気持ちが沈み込んでいるとき（詩篇 34、139 篇）
- 心配しているとき（ピリピ 4 章）
- 危機的状況に直面しているとき（詩篇 121 篇）
- 失望を感じているとき（詩篇 23、42 篇、イザヤ書 40 章）
- 誘惑を感じているとき（詩篇 1 篇、1 コリント 10 章）
- 孤独を感じているとき（詩篇 27 篇）
- 勇気を必要としているとき（ヨシュア記 1 章）
- 赦（ゆる）しを必要としているとき（詩篇 32、51 篇）
- 疑いが心の中にあるとき（ヘブル 11 章）
- 神からの保証を必要としているとき（ローマ 8 章、1 ヨハネ 5 章）
- 感謝しているとき（詩篇 136 篇）
- 喜びを感じているとき（詩篇 100 篇）



第四章

今度祈るとき

これからの祈りは、あなたの人生を変えるでしょう。6ページを見返してください。「正直なところ、私は_____」という文の空欄にあなたは何を書き入れましたか。8ページに挙げた三つの失望のいずれかが、あなたの心をむしばんでいないでしょうか。

今こそ、一步を踏み出しましょう。神が必ず助けてくださると信じ、決断しましょう。祈りを阻むものを退け、障害を乗り越え、思いのままに祈り始めることができるよう、神が導いてくださいます。落胆しても、歩みを止めないでください。「祈れるようになるまで祈り続けよう」というピューリタンの格言通り、祈り続けましょう。そうすれば、さらに確信を持って祈るようになるでしょう。

あるいは、基礎から出発する必要があるかもしれません。この冊子を通して「神との個人的で親密な関係を、実は持っていないかも」と感じたかもしれません。また「自分は罪人だ」

と（改めて）気付いたかもしれません（ローマ 3:23）。以下に挙げるのは何度でも確認する価値のある真理です。

- 自分で自分を救うことはできない（エペソ 2:8-9）
- 罪なき神のひとり子イエスは私たちには絶対に生きることのできない完全な生涯を全うされた（1ペテロ 2:22）
- イエスは十字架で死に、私たちの罪の代価をすべて払ってくださった（1コリント 15:3-4）
- 復活は神がイエスの犠牲を受け入れられた証しである（黙示録 1:4-6）
- 私たちは、信仰によって、主イエスを救い主として受け入れる（ヨハネ 3:16）

自らの罪の結果から救ってくださるよう、神に求めましょう。あなたを救ってくださる神を信じ、このお方とともに歩み、従う決心をしましょう。自分がその道からそれていると気付いたなら、悔い改めて何度でも再スタートしましょう。この願いこそ、あなたの生涯を通じて最も重要な祈りです。救いを求め、自らを明け渡す祈りこそ、他のすべての祈りの揺るぐことのない基盤なのです。